



5

指導ポイント



## ●「著作権」ってなんでしょう？●

### ○本節の目的

著作物の定義と、著作権法の基本的な概念を理解させる。とくに著作権ビジネスが、著作権の一つである複製権のコントロールによって成立していることを理解させる。

インターネット上に限らず、世の中に存在する文章、音楽、映像といった創作物は、基本的にだれかが作ったものである。だれかとは一人の人間である場合や、会社・組織である場合などさまざまではあるが、これらの創作物を作った者、すなわち著作者の権利を保護する目的で作られたのが、著作権法である。

著作権法では、そこで保護される「著作物」について第一章第一節第二条で「思想又は感情を創作的に表現したものであつて、文芸、学術、美術又は音楽の範囲に属するもの」と定義している。

一方、アイデアや手法、技術などは「著作物」ではなく、一般に特許法や商標法など産業財産権にかかわる法律で保護されるものである。混同を避けるよう指導されたい。

著作権は、特許などのように申告や登録をする必要がなく、作品の創作をもって自然に発生する。このため、基本的人権のような古くからある天賦の権利ととられることもあるようだが、実際のところ著作権法は 18 世紀のヨーロッパで生まれた、比較的新しい権利である<sup>†1</sup>。なお、日本で著作権法が初めて制定されたのは、1899 年（明治 32 年）のことである。

日本の著作権は、著作者の権利を守るという意味での「著作権」と、著作物を流通させる者の権利を守る「著作者隣接権」から成り立っている。これらの権利には、これまで著作物ビジネスに携わる者だけが関係してきた。しかし、デジタル技術の発達により、だれでも簡単に著作物を作成し、自分で流通させることも可能になってきたため、私たち一般市民にも関係するようになってきた。

デジタル技術が発達する前から一般市民にもすでに関係していたのが、著作権法第三十条に規定されている「私的使用のための複製」である。レコードからカセットテープに録音する、テレビ放送をビデオテープに録画するなどのアナログ技術による個人的な複製は、その規模が零細であり、商業流通の妨げにならないという理由から、認められてきた。

しかし現在では、個人であってもデジタル技術を使えば大量の複製が短時間でできるため、私的使用のための複製にもさまざまな制限が課せられるようになった。これに関しては次節で解説する。

†1 著作権に関するテキストは 15～16 世紀のものから多数残っているが、ここでは英国で 1710 年に制定された「アン法」を、現在の著作権法の考え方につながる最初のものとしている。

## ● どうして勝手にコピーしてはいけないのでしょうか？ ●

### ○本節の目的

私的使用のための複製の範囲と、考え方を身につける。また複製権を侵害すると、誰にどのような影響を与えるかを理解させる。法で制限されているから、あるいは技術で制限されているから、という理由からではなく、著作物のビジネスの仕組みを理解させることで、適切な著作物の私的利用のあり方を考えてみる。

私的使用のための複製がアナログ技術で行われていたころは、複製にも時間もかかり、品質も劣化するため、あまり問題とされなかった。

しかし、デジタルによる複製は、時間がかからないことや、品質が劣化しないことなどから、大量複製による損失や被害が想定されるようになった。デジタル技術による録音や録画には、その機器やメディアに対して一定額の補償金が掛けられ、著作権者に分配されている。これを、私的録音録画補償金制度という。しかし近年、この補償金制度の妥当性を巡る議論が活発化しており、一部には訴訟問題にもなっている。

今現実には大きな問題になっているのは、携帯電話の「着うた・着うたフル」をインターネット上にアップロードし、不特定多数の人間が自由にダウンロードできるようにする「違法着うたサイト」の存在である。2008 年末に日本レコード協会が公開した資料によれば、2008 年の違法着うたダウンロード数は、推定で 4 億 714 万曲であるとしている。

これまで著作権法では、著作物を権利者に無断で、誰でもダウンロードできる形でアップロードすることは違法であると規定してきた。しかし違法着うたサイトなど大量の著作権侵害事例に対応するため、2010 年より新たに、違法にアップロードされたファイルを、違法であると知りつつダウンロードすることも違法であるという規定が追加された。

## 問題解説 5 - 1

あなたが買った CD の音楽をコピーしてあげていいのは、だれまでだと思いますか？

[ 模範回答 ]

一緒に住んでいる家族まで

著作物の私的使用については、著作権法第三十条で次のように定義されている。

個人的に又は家庭内その他これに準ずる限られた範囲内において使用すること（以下「私的使用」という。）を目的とするときは、次に掲げる場合を除き、その使用する者が複製することができる。

これによれば、法的には家庭内に同居する人の中での著作物の複製は私的利用の範囲である。

ただし、親しい友人間での音楽の複製（MD へのダビングなど）は、日本ではカセットテープが普及してきたころから一般的に行われており、実際にプロとして活躍している音楽家でも、友人間

## 指導ポイント

で音楽を複製して多くの音楽体験を得たことを認めている人もいる。親しい友人関係で音楽を複製する程度なら、著作権者あるいは著作権管理団体からは大目に見られる可能性は高い。ただし「友人」と称して、不特定多数の人間に頒布することは認められない。

## ●オリジナルの作品はどうやってできるのでしょうか？●

### ○本節の目的

著作物の制作には必ず模倣の概念が入ることを理解させ、「オリジナルである」とはどういうことを考えさせる。

著作物の作成を習熟する近道は、既存の著作物をなぞって同じようなものを作ってみることである。したがって著作物には、どこかに必ず他の著作物の影響が現われる。また音楽などのように、一定のルールに則った表現は、人が良いと感じる組み合わせに限界があり、いくつかの要素が似てしまうのは仕方のないことである。

前述したように、表現手法や技法、アイデアといったものは著作権法では保護されないため、その自由度をもとに、新たな作品を作り出すことが可能になっている。

一方、ある著作物を原作として生まれる作品もある。例えば小説が原作の漫画、漫画が原作の映画といったもの、あるいは初回作が好評なため続編が作られたものなど、オリジナルがあって生まれた著作物のことを、「二次的著作物」という。多くの二次的著作物は、原作者の了解を得たり、利用契約をしたのちに作られる。

一方、「同人誌」などは原作者の了解も契約もなしに作られているものが大半である。原作者の了解なしに二次的著作物を制作して販売することは、著作権法に照らせば違法である。しかし、その違法性は親告罪的性格が強く、著作者本人が訴えなければならない。したがって、原作の著作者に発見されない小規模な販売であったり、見つけたとしても「まあそれぐらいなら」と著作者が大目に見る場合には、第三者が違法だとして勝手に摘発することはできない。

## 問題解説 5-2

教科書やニュース記事などの中から、「引用」にあたる部分を探して、書き出してみましょう。

### 〔回答のヒント〕

引用のルールとして、どこからどこまでが引用であるのかを明確にしなければならないため、カギ括弧でくくる、出典を明記するといったことが広く行われている。新聞などの論説記事では、過去の記事や文書の一部などが本文中に引用されることが多く、比較的容易に引用箇所を発見できるだろう。

## ●インターネット時代の新しい著作権の考え方●

### ○本節の目的

ルールとしての著作権も、時代に応じて変化しなければならないことを理解させる。また自分たちが作者となる可能性も飛躍的に高まっており、他人に利用を許諾していくときにどのような選択肢があるかを理解させる。

クリエイティブ・コモンズは、著作権法上の違法行為に対する親告罪的性格を利用し、「訴訟しない」と宣言することで、現行の著作権法では認められていない著作物の利用形態を積極的に認めたり、利用手続きの煩雑さを解消して、著作物の円滑な利用を促進する仕組みである。

この読本もクリエイティブ・コモンズで配布されており、「表示」と「継承」の2つを宣言している。これは、この読本を授業などで使う場合にインターネットユーザー協会が作ったものだと「表示」する必要があり、これをもとに二次的著作物を作った場合には同じクリエイティブ・コモンズを「継承」しなければならない（「表示」と「継承」を付けて発表する）ということの意味する。

逆に言えば、その2つのルールさえ守れば、いちいち著作者に許可を求めることなく、誰でもこの教科書を自由にコピーすることができ、商業利用することもできる。また「改変禁止」という条件も付けていないため、二次的著作物を作るときに内容を書き換えたり、文章や絵を追加することもできる。

当会が本書にこれだけ高い自由度を持たせている理由は、情報リテラシー教材は、時勢や地域の事情によって改変されるべきであると考えており、その改変を指導者自身が行う場合に、いちいち著作者である当会に許諾を求める手間や金銭的成本を削減するためである。この読本の目的は、未来を見据えた情報リテラシーが広く伝播されることであり、その伝播が著作権法で制限されないようにとの配慮である。

クリエイティブ・コモンズは、誰でも自由に利用できる作品を増やすことで「著作権が怖くて他人の作品を使えない」という風潮を打破し、多くの人が「他人の作品を真似ることから創作を行う」ことを手助けするものである。誰かの作品が安全に利用できるだけで、多くの人が根源的に持っている「作品を作りたい」という欲求を刺激することができると思う。

この読本を題材に、新しい創造の可能性を、子どもたちと共に考えていただければ幸いである。